

草庵仏教

第135号
(発行日)
2001年9月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638126 西宮市
小松北町1-2-3
電話・FAX(0798)
41-5346
(発行人) 土井紀明
メール naridoi.ne.jp@lycos.ne.jp
http://members.tripod.co.jp/souan211

《 聞法会ご案内 》

- * 同朋の会 (念佛寺)
22日午後2時
.....
- * 聖典講座 (念仏堂)
第1土曜日午後3時
- * 念仏座談会 (念佛寺)
第3土曜日午後3時

怨念からの解放

K「今回は憎しみ・怒みのことを問題にしたいと思います。まず人から憎まれる場合にどう対応したらいいのでしょうか」

Y「人から憎まれることはだれでもありません。ブツダやイエスでさえ人から怒られました。でも聖者の場合は怒まれる正当な理由が自分の方にならないのに怒まれたといえましょう」

K「私たち凡夫は人から怒まれる種があつて怒まれるわけですね」

Y「そういう場合が多いですね。一方的に誤解されてというのもありませんが」

K「聖者ではない凡夫は人から憎まれる原因があつて憎まれる。では人から憎まれたら、どう対応したらいいですか」

Y「先ずは、自分に対する他者の評価や称讃や怨憎は、自分の権限外の事だということです。そういう意味では私を憎むか憎まないかは他者の自由です。だれも他者が怒むのを止めることはできません」

K「人が私を怒むかどうかは(我)のことにあらず彼のことなり」ということですね」

Y「ええそうです。その上で、私自身が人から怒まれた時に、

それをどう受けとるかです。それは逆に(彼のことにあらず我)のとなりです」

K「Yさんはそういう場合どう受けとりますか」

Y「私自身は大変お粗末な人間ですから、人から憎まれたり怒まれたりしても仕方がない人間だと、本当に思っています」

K「自分のような者は人から怒まれてもやむを得ない程の人徳のない人間だといわれるのですね」

Y「ええ、身にしみてそう思っています。もちろん憎まれたり怒まれたりすることは悲しいことですが」

K「しかし、誤解されて怒まれる場合もあるでしょう」

Y「ええあります。しかし、誤解されて何とか生きられる私です。私の心の中を正確に知られたら、その人は私にあきれてしまい、(こんな人とは思わなかった)と、私を見放すだろうと思いません。ですから誤解されて何と人につきあつてもらえているのです。だから少々誤解され憎まれても当然のことです」

K「怒まれても憎まれても仕方のない人間だと感じていると、怨んだり憎んだりする人を怨み返し憎み返すことはなくなるで

しようね」

Y「なくなるとは言えないにしても減ってくるのは事実です。でも煩惱具足の凡夫ですから、憎まれたら憎み返すような思いもその時には起こりえます。が、憎み続けるといふようなことはなくなっていくのではないのでしょうか」

K「じゃあ、あなたは現在憎い人も怨みに思う人もありませんか」

Y「今のところそういう人はありません。けれどもこれから先は分かりません。たとえば私の子供が理不尽に殺されてもしたら、相手を怨み続けるかもしれません」

K「でも(罪を憎んで人を憎まず)という言葉がありますね」

Y「そういう事が本当にできるのは聖者であろうと思います。私が現在憎い人がいないのは人を憎むべきほどの縁がまだ来ないのでしょうか。もし憎むべき縁が来れば凡夫ですから憎悪を燃やすかも分かりません。ただ自らの悪の深さを少しなりとも知らしていただき、先ほど言いましたように、怒まれて当たり前の人間だと感じていますから、怒まれて怨み返すことはいずれ減少するのは事実だと思います」

K「自分の悪は仏法によって知らされるのですね」

Y「ええそうです。仏法のご恩

によって自身の姿が知らされてきます。それともう一つ大事なことがあります」

K「なんですか」

Y「自分の悪の深さ、お粗末さを知るといっても、ただ知らせていただくだけではいけないのです。それだけでしたら、つまらぬ自分がイヤになり、自分に腹が立ち、自分に落ち込んでしまします。自分に嫌気がさしているのに他者からなじられたり憎まれたりすると、その相手を受け入れるどころか相手を逆に憎み返すことは世の常です」

K「自分が自分にやりきれないのに、追い打ちをかけるように他者から責められたり憎まれたりすると、相手に対して更なる憎しみが湧いてくるでしょうね」

Y「ええそうです。ところが、自分のどうしてみようもなさ、人徳のなさを思い知らされても、落ち込まず、そんな自分に腹も立たない。それどころかそういう自分を素直に受け入れることができる」

【 秋季彼岸会 】

9月22日(土)

午後2時始まり

*場所 念佛寺仏間

(どなたでもご自由にお参りください)

K「それはどうしてですか」

Y「阿弥陀仏が私の全体、お粗末な私を大慈悲し、受け入れてくださっているからです。阿弥陀仏の（愚悪の凡夫よ。私はあなたを見捨てない。あなたを受け入れて離さない）という広大な慈悲が身にしみて、おぞましい自分でありながら、有難いという思いが湧いてきます」

K「悪の深い自分を喜んで承認することができるのは、阿弥陀仏の大悲が自分にそそがれているからですね」

Y「全くその通りです。それに、他者があさましいことをしても余り責める気にはならないのです」

K「なぜですか」

Y「私自身を宿業の身であると感じるからです。自分でどうにもならない宿業を抱えている身であると知ると、他者の宿業も感じられてきます。（ああ、あの人も自分で自分を始末できないんだなあ）と感ずるようになってきますから、相手の非や過失を責める気持ちは和らいできます。故藤原正遠師がよく、（相手を責める気持ちは起こるとき、自分にはわからないけれど、あの人はそうしなくてはならない訳があるんだなあと思ひ直す）ことを教えられました」

K「その人はそうせずにはおれない訳があるということですね。藤原師のお言葉は、人には人そ

れぞれの宿業があつて、どうしてもそうせずにはおれない深い因縁があると知ることに通じる言葉ですね」

Y「ええそうですね。自分で自分が思い通りにならないのに、人には（ああなつて欲しい。こゝうなつて欲しくない）と過度に期待し、相手が自分の期待通りになつてくれないと相手を責めるのは我が身知らずともいえません」

K「ところで、憎しみや怨みを抱くことが少ないと、生きるのは安らかでしょうか」

Y「できるだけそうありたいですね。親鸞聖人のお手紙には（念仏する人をにくみする人をも、にくみすることあるべからず。あわれみをなし、かなしむところをもつべし）とあります。この言葉は法然聖人のお言葉だと聖人はおっしゃっています」

K「ブツダの言葉にも

『怨みをいだいている人々のあいだにあつて怨むことなく、われらは大いに楽しく生きよう。怨みをもっている人々のあいだにあつて怨むことなく、われらは暮らしていこう』（ダンマパダ）とありますが、こうありたいものですね」

Y「（大いに楽しく生きよう）と言われているのがとてもいいですね。ツバを天に向かつて吐けば、自分のツバが己の顔にかか

るように、憎悪の感情は憎悪される人より、憎悪している本人が最も苦しいし、怨まれる人よりも、怨んでいる本人が一番苦しいですね」

K「それに関連してやはりブツダの言葉に

『「かれは、われを罵った。かれは、われを害した。かれは、われにうち勝った。かれは、われから強奪した」という思いをいだく人には、怨みはついに息むことがない』（ダンマパダ）

というのがあります」

Y「そうですね。（あの人から悪口を言われた）と腹を立て、（あの人を私を傷つけた）と憎み、（あの人に負けた）と悔しがり、（あの人から損失を蒙った）と怨みを抱く。人間は人を憎んだり怨んだりしようとすれば材料はいくつでも周りに転がっています。しかし、それを憎むか憎まないか怨むか怨まないかは、その人自身の問題です」

K「自身の問題というのは、その人の受けとり様ということですか」

Y「というか、いろんな縁で人を憎んだり怨んだりする私の心の底にあるのは我執・我愛の心ではないでしょうか」

K「自分へのこだわり（我執）とか我が身を可愛いという思い（我愛）といわれるのですね」

Y「ええ。自我愛が心の中に根を張っていて、その自我愛から

他者とつき合うととかく

（かれは、われを罵った。かれは、われを害した。かれは、われにうち勝った。かれは、われから強奪した）という思いが何かにつけて起こります。その思いがブドウの房のように我が心に結ばれて怨みがたまるのでしよう」

K「そして私たちは人から憎まれたら憎み返し怨まれたら怨み返してしまふのですね」

Y「ええ、それでお互いの対立感情が何時までも続くのですね」

K「ブツダの言葉に

『実にこの世においては、怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息むことがない。怨みをすててこそ息む。これは永遠の真理である』（同上）とあります。なかなか怨みを捨てるのが難しいのです」

Y「私たち凡夫には聖者のように憎まず怨まず常に平和な心で生きることがとても出来ない相談です。けれども、お念仏によつて、我が身の煩惱の深い事を知つて、怨まれるのは我が悪ゆえと、怨み返すことなく、また煩惱深き我が身に（汝、我が子よ、私は汝と共にいる、汝を見捨てない）と大悲をそそぎたもう仏心に満たされるところに、他者への憎しみや怨みが洗われていくのを感じます。これは我が賢きにあらず、ひとえに仏の大悲のおはたらきのゆえと存じます」

（了）

【電話相談室】

（秘密厳守・匿名可・無料）

（時間）
午前8時より午後10時まで

（電話）
0798-41-5346

（相談内容）
人生上のいろいろな悩み・
信仰上の相談・仏事の相談
*相談員が留守のときがありま
すので予めご承知ください。

〈伍職つれづれ日誌〉

今年の夏も三十五度を越えた日が多く、日本の夏も南アジア並みの極暑となった。クーラーの普及でどのお宅にお参りしても昔のように汗をかきかき読経をすることは殆どなくなった。ただクーラーの部屋の出入が増えるので体調を整えるのが難しいのか、何日も夏風邪をひいてしまう。夏のお盆は関西では八月十三日に始まり十六日には終わる。毎年この時期は肉体的にハードになり、短い期間だが体力のない私には結構こたえる。十五日に念佛寺の盆法要を済ませ、十七日からゆっくりさせていたでいて二十日ごろにようやく疲労がほぼ回復した。十五日の盆法要にお参りに来られた方はわずかであったが、暑い中に来ていただくだけで大変なご苦労と思わずにおれない。

*浜屋西宮店での聖典講座を九月から念仏堂でおこなうことになった。

*お盆が済むと時々旅に出るが、今年はおもっぱら家で過ごす。何か物足りない気もしないではないが。

歎異抄 第十一章第三講

一文不通のともがらの念仏もうすに
うて、「なんじは誓願不思議を信じて
念仏もうすか、また名号不思議を信ず
るか」と、いいおどろかして、ふたつ
の不思議の子細をも分明にいいひら
かして、ひとのこころをまどわすこと、
この条、かえすがえすもこころをとど
めて、おもいわくべきことなり。

(歎異抄第十一章より)

ここである人が「汝は弥陀の誓願を信
じるか、それとも名号を信じるか」とい
う質問をしています。そういう内容の
質問をすること自体が、弥陀の本願を我
が身に信受しないで、知らず知らず本願
を観念的思想的に受けとっているからで
ありましょう。本願を信じることと名号
を信じることは、実際の念仏生活ではま
ったく一つのことです。

弥陀の本願、広く言えば真宗の教法を
学習し、理解して、理解したものを記憶
する。そのように記憶された真宗の教法
は「真宗思想」といえます。

真宗をなるほど思想として学ぶことも
できます。それはそれで意義もありまし
ょう。しかし、学んでおぼえた真宗思想
を規範として生きようとすると、そうは
生きられないのであります。

たとえば、

「親鸞聖人は弟子一人ももたず、ご門徒
を御同朋と敬われた。だから自分を指導
者と思つてはならない、まわりのご門徒

を御同朋と敬わねばならない」

「人間はすべて仏の子であつて、平等
にして尊い存在である。だからどんな人
も差別しないようにしよう」

「人間は我執・我愛の煩惱具足の存在
である。おのれの罪の深さを自覚して、
自らを善とし他者を悪と見なす傲慢を離
れなければならぬ」

「人はお互いにつながりあつて一つの
のちを生きている。だから他者と連帯し
て共に生きるようにしなければならぬ」
などと考へて、真宗思想を実践しようと
してもそうはいかないでしょう。

たしかに真宗の教の中にある人間観や
世界観から人間の平等性や尊厳な生命観
や罪悪観や社会倫理などが導き出されま
す。

そして実際、聖人はご自分を罪悪深重
の凡夫と慚愧され、ご門徒を敬い、人間
の平等感に生きていかれました。それに
違いはありません。

しかし、それはただかかれた真実信心
の結果として、信心の智慧（仏徳）から
の自ずからなる認識であり態度でありま
しょう。

ですから真実信心を抜きにして私たち
が真宗の教えを手本にしたり規範の如く
にして、そうならうといつてもなれるもの
ではありません。

明信寺師という名師の言葉に

「善知識のご化導をご註文の如く思い、
教の如くならんとしても、それはなれぬ。

たとえば鶴や船で形を折つて小供に与え
る時は、暫く眺めておつて直ぐ解く。
やがて元の如く折らんとするも出来ぬゆ
え泣き出す。今もその如く仰せの如くな
らんとするも金輪なれぬ。ただ仰せのま

まを聞くばかり」

とありますが、真宗の教えを学んで、そ
の教えを手本として生きようとしても、
そうはなれないと師は言われます。

出てきた源（信心）に立ち返らずに、
出てきた（結果）を聴いて、その結果を
まねようとしても、実際にはそうはいか
ないのです。信心は認識と行動の源です。
その源に帰らずに、認識と行動をまねる
のは無理があります。

くりかえしになりますが、弥陀の本願

に助けられた結果として与えられた世界
観（人間の平等性・尊厳性・罪悪観・人
生の意味など）を学んで、直接その世界
観にそつて行動しようとするのは、い
わば真宗を思想として学び、それを自己
の行動の原理にしようとしているのです。

自己や社会のいろいろな問題に対して、
真宗の教えを学んで、教の中に問題の答
えを見出し、それによつて行動しよう
とするのですが、はたしてそれは親鸞聖
人の思召しでありましょうか。

真宗の思想や親鸞の思想を学習して、
それで間に合うのなら、真宗は思想とし
て学ぶだけでいいのであつて、本願を信
ずることも念佛を申すこともいりません。
そういう私は「弥陀に助けられる」必要
もなく、念仏申す必然もありません。弥
陀をたのまなくても生きていける私だけ
です。けれども真宗（思想）は自己全
体を救わないのです。

真宗を学んでもたんなる思想的な知識
や觀念に安住できず、いよいよ「思想益
なし」（大経下巻）となる時、ゲエテが「人
間というものはいろいろなことを知つて
いるが、その人間の知っていることとい

うものは、いざという場合には役に立た
ぬものである」というところに基づく
時、学んで記憶した真宗思想も親鸞の思
想も自分には無力となり役立たなくなる
時、「いずれの行もおよびがたき身」救わ
れがたき自分にぶつかつてしまふのです。

しかし、むしろそこに弥陀の本願が直
接的に響いてきます。まさに勅命として
ひびく。弥陀の本願を学ぶとか、考へる
とか、納得するとかいう手間もひまもい
らない。聞かされる本願の仰せがそのま
ま救いそのものとなります。

明信寺師はそこを「ただ仰せのままを
聞くばかり」と申されたのです。

なお多くの先人がこの点について、
「聞くばかり。聞いて向こうにあるもの
を取り込むように思うは違いなり。聞く
ばかりということまことに尊い」
(等覚寺師)

「信ずるとは仰信すること。聞いた心
が仏法ではない。仰せが仏法とはこのこ
とじゃ」
(禿頭誠師)

「聞くほかに信がないとは、自分の聞
いたことに用事がないということ」
(佐々木蓮磨師)

といつておられます。

弥陀の仰せが仏法であつて、聞いて取
り込んだ教義や真宗思想は仏法そのもの
ではなく、形式であります。思想であり
概念です。セミの抜け殻はセミにそつく
りだがセミそのものではない。知識化し
思想化した本願は生ける本願の抜け殻で
す。真宗を思想的に研究するのは良いと
しても、自分自身の永遠の救いであら
うには、本願を自分の心に取り込んで思想
化する以前の、本願そのものの直接の喚
び声に触れなければなりません。(了)

香港の念仏者

信仰雑誌「法雷」の編集後記に、香港在住の中国人女性二人が真宗に帰依し、今般、本願寺（西）で得度されて真宗僧侶になられたという記事が載っていますので、ご紹介いたします。

一人はもともと中国本土で中国仏教の出家者（尼僧）だった方です。もう一人は香港の方で在家から真宗僧侶になられました。

後者の女性が真宗にであわれないききつはこうです。

1937年、日華事変が勃発し、日本軍は広州を爆撃しました。その時幼児だった彼女は母親の懷に抱かれて山中を逃げ回りました。母親は幼児を抱きかかえながら、終日終夜（南無阿弥陀仏ナムアマミダブツ）と念仏し続けていたそうです。母の念仏が自力念仏であるか他力念仏であるか知るよしもありませんが、子供にとっては逃げ回る苦しい日々の中で母の口より流れる念仏の声を幾日も聴かされたのでした。そういう幼い時の体験は彼女の耳の底、心の底にナムアマミダブツの念仏の音が知らず知らずしみこんだのでした。それから五十数年後、不思議な縁があつて真宗の教えを聞くことがきっかけとなって、ナムアマミダブツが耳の底にこだましているのに驚いたのです。こうして母の念仏を通して心に刻まれた念仏のこだまは、真宗の教えを通して「汝を撰取して決して捨てぬ」との阿弥陀仏の（よび声）であり、仏のさけびであると、

初めて知らされたのでした。彼女は

（母の胸に抱かれて念仏の声を聞いた時も、それは阿弥陀仏がすでに自分を喚びたもう声でした。いな十劫、久遠劫来、喚びづめに喚ばれている私でありました。今日までそのことを知らずに自力作善の道に走っていた愚かさ、我が身知らずを思い知らされ、阿弥陀仏に申し訳ない、愧じ入るばかりです）と語っています。そして

（現在の中国仏教はどこを尋ねても、「受戒して、座禅し、念仏しなさい」と教えるのみ。日本の真宗のような他力念仏を教えてくれる人師は一人もいません。日本には八百年昔、在家・出家、持戒・破戒を問うことなく本願他力念仏の救いが親鸞聖人によって開かれ、今も脈々と伝えられていることは実に素晴らしいことです。今回、中国人の身で本願寺の僧侶として得度を受けたのも、単に日本仏教、本願寺の組織の中に入るためではありません。この素晴らしい本願他力の伝統、聖人一流のご勸化をこうむる仏弟子としての信念、自覚を一層深め、さらに、真実の仏法を求めて止まぬ中国の同朋にもおすすめしたいの一途です）と切々と所信を語られています。

インドで釈尊がお説きになった本願念仏の仏法が、一切の衆生を救う法として、歴史上に実際に興起したのは中国でした。曇鸞・道綽・善導といった中国浄土教の祖師方のご恩によって民衆の上に根付いていったのです。しかし善導大師以後は、善導の後継者として法照・少康といった方々が出られましたが、他力本願念仏は自力聖道の念仏の中に埋没していったのです。ところが、中国で起こった本願

他力の念仏は、遠く離れた日本の法然および親鸞聖人によって回復されたばかりか、さらに自力的色彩を洗い落として純粹な本願他力念仏として開顕されて現在まで豊かに伝えられています。

ただ中国の民衆は、自力的あつたとしても人生の苦しみの中から連綿として念仏を申ししてきたのです。現在の中国本土や台湾やシンガポールの中国人に念仏申す人は多いのです。お念仏を自力的にしか受けとらなかつたにしても、中国人が現在に至るまで南無阿弥陀仏の言葉に親しんできたことは確かな事実です。

今年の春にシンガポールに行きました。にぎやかな市場の中に小さなCD専門店があり、そこに仏教の教えを映像化した多くの仏教CDが売られていました。無量寿経の音楽CDすらありました。そのCDは極楽の情感を「なむあみだぶつ」の声で歌い上げているものです。もっとも私たちは南無阿弥陀仏を（ナムアマミダブツ）と発音しますが、中国人は「ナモアミトウ」と発音しているようです。

中国の民衆に深く伝わっている（南無阿弥陀仏）のみ言葉が、釈尊の真意である弥陀本願他力の念仏として了解されるなら、中国に真の在家仏教・民衆仏教が育つことは十分可能なことであります。現在に至る中国仏教二千年の歴史の中に、そういう素地は多分にあると思います。最近、長年低迷していた中国仏教は盛んになりつつあります。中国仏教の復興にともなつて、南無阿弥陀仏の言葉が民衆の心の底に流れていることを素地に、南無阿弥陀仏の「真実のいわれ」がの人々に伝わることを念じて止みません。

欧米に真宗を伝えることも大事ですが、二十一世紀は中国が歴史の表舞台に立つ時代と言われていますから、かつて中国の祖師方が起こして耕した本願念仏の浄土教を、中国民衆の上に純粹な形で回復することができれば、浄土真宗は世界の真宗となると思います。（了）

【真宗門徒の心得】

①日常生活の中で実際にお念仏を申し、お念仏の意味を知るために仏法のお話を出来るだけ聞くように努めます。申される念佛のいわれを聞き開くとき、初めて人生が安定します。

②朝夕、お内仏（お仏壇）にお参りし、阿弥陀仏を礼拝し、念仏し勤行をします。お勤めはその名の通り、たいぎな時もいやな時も己を励ましてつとめるものです。（勤行本や数珠は畳の上に直接置きません）

③「神だのみ」「仏だのみ」「占い」「厄除け」「見てもらい」「日の良し悪し」などにかかわつたりこだわつたりしますと、阿弥陀仏が私どもにかけてくださる願い（本願）を見失つて、生涯目に見えぬもの（霊やタリヤバチなど）に振り回され、縛られてしまつて、主体的な生き方が出来なくなりまふ。